

【福島大学むらの大学アーカイブ 30】【飯館 Chapter 2】
「不死鳥の如く」持続可能な農業を飯館で
ふくしま再生の会副理事長 菅野宗夫さん



インタビュー日時：2024 年 10 月 13 日

インタビュー場所：菅野さんの自宅

聞き手：齋藤百華、藤谷友輝、城取ゆきの、久保田彩乃

プロフィール

昭和 26 年（1951 年）1 月 18 日生まれ。73 歳（取材当時）。飯館村佐須地区にて生まれ育った。震災後はふくしま再生の会を設立。除染活動などに積極的に取り組んだ。現在では飯館電力取締役代表、佐須地区区長も務めている。

1. 震災当日、その後の避難について

―震災当日、どこで何をしていたか教えてください。

菅野：震災が起きたときは、一辺が 1 メートルほどの自家用のシイタケの原木を伐採をしたものを、山から搬出していたのね。山の急斜面のために運搬車があって、一度車の入るところまで運搬車に乗っけて出していた。

―震災の当日は、シイタケの原木の搬出作業をしていたのですね。

菅野：原木の搬出の作業をしていたときに、突然ものすごい急激な地震が来た。それで自分が機械につかまっているのか、逆に機械を支えているのか、何ともいえなかった。うちの家内と一緒にそこにいて。そうしたら下に、20 メートルぐらい離れた低いところに水たまりがあったんだけど、その水がジャポンジャポン、王冠のごとく飛び跳ねるという感じになるじゃない。あれがそんな感じで赤濁りになって、ものすごい。山は揺れる。「山津波で全部持てかえるな」と、そんな感じ。もうおしまいだと思っていた。

そこから国道に行って、ここから 10 キロくらい離れてるんだけど、国道に出るまでの間が 1 キロ半から 2 キロあって、そこまで「さて、出れるのかな」という思いと、あとは、おうちは全部壊れてるんじゃないかなと思った。当然、家族のことは心配だけれども、学校に子どもたちがいて、さてどうなってるんだろうというような感じも。「もしかしたら帰り足でバスの中かな」とか、そんな心配もあって。これだけの地震だから。

原発の事故なんてのは全然考えてない。全く。なんでかといったら、地震が起きたら自然災害で、そっちしか頭にないよね。全くないです。あと、前から聞いていた安全神話もあって。それで津波が怖かったから。この近くで、うちのおやじも仲人して、その船主のところに行った嫁さんもいるし、さてみんなどうなってるんだろうと思いました。

―津波のことは何で知ったのですか。

菅野：津波のことを知ったのは、軽トラックに乗かって国道に出たときに、ラジオで聞きました。ただ一番最初、30 センチとか何とかいう表現だった。だから、「それなら大丈夫だけれども、何せ、うちはどうなんだろう」と国道に出て、国道沿いにお家があるんだけど、そこが何でもなかったの。「よかった」と感じてでしたね。でも南相馬市の合掌造りで造られた大甕小学校の体育館があって、長さは 15 間でもものすごく大きいから、それはつぶれるなと思ったんだけど、でも来たら何でもなくて、よかったという感じでした。

―では、家も無事だったのですね。

菅野：うちも無事でした。飯館では大きな土砂崩れというのはなかった。うちの畑のところの、畑が全面的に道路に流されたというか入ってきました。あとは瓦が落ちてるところがありましたね。その被害はあったんだけど、あとは飯館はそんなでもなかった。飯館はやはり昔から岩盤が強いということがあった。

途中で「今度は津波が大きいのが来たぞ」、「津波が来てるよ」という話が伝わってきて、それでその心配ばかりでした。

―原発事故というのはどのように考えていましたか。

菅野：そのあとの原発事故の部分については、その日には完全に停電になって電話も通じない、そういう形だったので情報は来なかったけど、あのときはどういうふうになっとったかな。ラジオはかけられなかったですね。

夜はみんなで集まって「みんな無事でよかったな」ということを話しました。余震がすごくて、昔のおうちに行って、みんなで板にくぎを打って、そこにろうそくを何本も立てて、みんなで雑魚寝だよ。いざまた余震が来たら逃げるしかないということもあって。それで 2 日 3 日、そこでばかり過ごしていました。

12 日は、今度は南相馬の人たちとか、20 キロ圏内の小高の近辺の人たちとかが、みんな飯館

に避難をしに来たわけ。当時、大体飯舘では 1500 人から 1700 人が公共機関に入っていて、もう入れないような状況だから、「そんでは一家総出でもいいから、うちで受け入れっか」なんて話をしていた。そうしたら今度は「いや、飯舘も危ないんだぞ」って。「結局、放射性物質がこっちに飛んできてんだから」という話が出てきた。

—飯舘が危ないという話は誰から聞いたのですか。

菅野：知り合いというか、もうお互いにさまざまな形で入ってくる。これは行政からというわけではないです。行政からはこういうことを言われた。「事故が起きたらば、そのあとは、原発の事故が起きたから外には出るな。出たらば土には触るな。そしてあとは、窓はできるだけ閉めておけと。」ぱつと言われたけど、何のことだか分かる？「なんで窓を閉めなくちゃ駄目なの？」という事に対して「危ないから」と言われたって、においもしない。色も付いてない。そうすると捉え方、対応の仕方、みんな三者三様なんですね。そういう中での対応で、本当に大変でしたね。

ある日、まだどう対応すれば分からず不安が募る中で、うちのおじいちゃんがお昼に帰ってこないの。

—宗夫さんのお父さんですか。

菅野：私の親です。じいちゃんに教わったことというか、生きる上で大事なことを考えさせられる出来事があった。「外には出るな。出たらば土も触るな」と言われているときに、おじいちゃんがお昼 12 時半過ぎてもいない。普通ならいるわけなんだけど。自家用野菜の、ニンニク畑の草むしりに行ってた。土に触るなと言われてる中でです。本当に大変です。「おじいちゃん何やってんの、お昼だよ」って言ったら、ぐいっと向かれたときに、もう血の気もない。蒼白な顔でにらみ付けられた、俺はそういうふうに見えたんだね。「なぜやってて悪いの」みたいな感じに見えました。今はこういう格好でしゃべってるけど、当時はつらくて言葉にならなかった。今しゃべるのもつらいくらいなんだよね。

おじいちゃんおばあちゃんというのは、自家用野菜を作って、その野菜を気持ちよく「ああ、うまいな」って喜んで食べてもらえるのを、一つの励みとして生きてるわけです。私たちがお金取りをしてるのと同じだ。子どもたちが学校に行って学ぶのも同じなんです。あともう一つ、おじいちゃんおばあちゃんは野菜の成長する姿を見て、生きがいをもらってる。自分で種をまいたらそれが成長してくる、これはものすごく生きがいもらえるんだ。たぶん皆さん方のお父さんお母さんだって、一線を退いたら、必ずプランターとか何かにものを植えて、その成長を見て楽しんだり、食べたりするはず。これは人間の本能なんだよ。人間というか、生きている上では、どんなものだってそういう形だと思うんですよ。

おじいちゃんにこんな形ですごい目でにらみ付けられたのは、俺が言った「何やってんの」という言葉が、殺し文句みたいな、やっては駄目だみたいな、そういうふうに関心したんだろうね。そういう口調で言ってしまったというところに、反省しきりです。

これでは駄目だと。「やっぱり生きがいを感じるような場所を、何か作物の栽培できる場所を見つけなきゃ駄目だ」ということで、ただどこでは汚れた土になっちゃったということなので栽培はできない。別のところを探そうということで、ぐるっと浜のほうから探して探して、結局、宮城県の丸森町の筆甫というところにたどり着いたのね。何故そこまで行ったかという、飯舘は当時、44.7 マイクロシーベルトあったのね。そのときに、福島市の中央郵便局のうしろの保健所のところで、そこでは 22 マイクロシーベルトあったのね。「飯舘の半分は福島だな」なんて軽い気持ちで。当時は放射能の実態が分かんないので。せめて、福島よりも低いところを探そうってことで。でもあまり遠くにも、大変だから行けないなと回りに回っていて、その丸森筆甫というところにお世話になりました。

そこで田んぼを 6 反歩と畑を 1 反歩お借りをして、2019 年まで農業をしていました。2011 年から 2019 年まで 9 年間、生きがいをいただきながらの避難生活でした。

―避難は丸森にしたのですか。

菅野：いいえ、避難は、丸森に避難したんじゃないんだよ。避難は伊達のほうにした。私と父親と妻は伊達の保原の方に、息子と孫は最初は伊達の月舘町に避難をしたの。避難先が伊達の保原町。息子は伊達の月舘町。役場は福島市の飯野町。ある程度の農業は丸森で行うなどをしながら、我が家を活動拠点として、2011 年の 6 月 6 日から「ふくしま再生の会」を設立し、組織の地域代表として始まりましたね。

―避難生活において、伝えたいことはありますか？

菅野：私の考え方そのものがそうなんだけど、事故直後からみんな生活を奪われ途方に暮れ大変な状況であつたんですよ。ここはすぐに避難をさせる地域ではなかったのね。20 キロ圏は避難をさせて、それ以外のところは、さまざまな仕組みの中で避難をさせた。飯舘は計画的避難区域ということで、1 年間に 20 ミリシーベルトを浴びるおそれがあるから、計画的に避難しなさいよという形ですね。要するに、ここで農業も生活も駄目だよという、そういう形ですね。ウシもいたんだけど、ウシも市場を介して全国の方に引き取っていただいてから自分も避難をしたということですね。

私は、避難場所からここに通い、丸森で栽培しました。ここでは栽培にも取り組みました。NPO 法人を立ち上げて、見えないものを見える化したり、あるいは復興再生の取り組みをしたり、除染の試みをしたりとかに取り組んだんですね。私自身は全然、前向きにトライする気持ちが事故直後から強かったので、知識ある人と一緒に取り組んでいましたね。まずはやってみないとね。

正直言って、福島事故から皆さんに伝えたいことや学べる事はいっぱいありますね。例えば、経験したことのない有事が起きてしまったのですから、そういう不安に対し、皆が信頼しあって乗り越えることの大事さですね。特に初期対応の時には欠かせないと思います。正確な情報を発信する事の大事さを痛感させられた出来事もありましたね。

2. ふくしま再生の会での活動

―ふくしま再生の会が設立された経緯についてお聞かせください。

菅野：私自身、原発事故の一年前から都会の方々に自然の恵みを積極的に届ける活動をしてまして、その関係者から私の存在を知り私を訪ねて来られたのが 18 人のメンバー達でした。この地で活動したいというメンバーとの話し合いを古い家の居間でしたのを昨日のように思い出せますね。それくらい印象的で運命的な出会いでしたよ。

行政と住民、大学研究機関、産業界、メディアと連携し、復興を目指さなくてはという私の思いと合致し、この地でこのメンバーと協働して継続的に活動することを決めた時が、ふくしま再生の会の始まりですね。

―そのメンバーは、専門家の方や研究者の方なのですか。

菅野：いや、研究者もいれば、さまざまな人がいましたね。

メディア関係もいれば、高校の先生の OB の方もいる。東大の現役の先生もいましたね。都会のリタイアした人が多かったですね。飯舘の人はいなかったと思います。

―1 年前の活動をもっと詳しく知りたいです。

菅野：東京の築地本願寺の、毎月一回開催される安穏朝市に、安心して食べられる農産物や加工品を、福島から私と相馬の方が出品していたんですよ。出品しながら情報交換などをしていたときに、実行委員の方から「福島の飯舘には、一昔前の衣食住の大事な文化があるから、そこに今年の秋は研修に行きましょう」ということで、大型バスでここに来られたのね。民泊もしてもらい、田舎の暮らしを体験していただきましたね。自然に感謝しながら一日をみんなが主役で楽しむという、毎年開催している農業まつりにも参加していただき、印象深い土産物を胸に帰ってい

ったんです。この繋がりがそのあとにつながっていくんですね。

そんな中で、事故が起きてしまった。そうしたらメンバーは「福島に行ったら、ちょっと変わった人間が飯舘にいるから、そこに訪ねていったほうがいいよ」って言われたんだって。それで私の元に來たのね。

—この時訪ねてきた人たちが、ふくしま再生の会の皆さんということなのですね。

菅野：そうです。今は280名ほどになります。13年間で増えました。今も増えてると聞きます。

—再生の会が結成された後、最初はどのような活動をなされたのですか。

メンバーとの話し合いの中で、行政に対して、また学者に対して不信任感から何からが出たのです。それを解消するには、与えられたデータでは駄目だ、住民が参加してデータを集めなければって考えた。「専門家しか測れないんだなんていう形では駄目だから、素人でも測れる機材を開発してもらいたい」ということで、東京のベンチャー企業とか何かの人もいたので、それでGPS付きのガイガーを開発していただいた。その精度は日本の高エネルギー加速器研究機構（KEK）、その監修を受けて。村民が関与する形で測定するようにしました。

—最初の活動は線量測定から始まった。

菅野：一番は、見えないものを見える化することが大事だということで、まずは線量測定が一番最初だね。その村内の測定についても、一応再生の会でやってたんだけど、「やっぱり村民みんなに理解をしてもらうには、みんなが関わらないと駄目だ」ということで。生活路線が大体500キロくらいで、その路線を測定するのに、ちょっと行政に知ってもらって、対応してもらうような事をお願いしたらば、「それは2、3人でできっぺ」と言われたの。できるんだよ。できんだけど、2、3人がその測定に関与するよりは、広く浅く、欲を言えばきちんと、20行政区あるから、各行政区2人ずつで自分の行政区を測るということで関与すれば、40人の声で、みんな放射線の勉強にもなるし。放射線とは、放射能とはこういうものだとか、あるいは「測定したら、今回こういうふうに出たけども、このあと見たらばこういうふうに変った。高いところから低いところに移動したんだというのが分かった」とかいうのが、専門家じゃなくて、村民が言えばそれだけ説得力もある。そのような形でやって、村からも委託されるようになりました。

—線量測定は、期間としてはどのくらい行っていたのですか。

菅野：期間としては、たぶん6年か7年くらいやったかな。今でもやってるんだけど、村民は関与はしてないような形になってます。

地区ごとに、行政区ごとに。そうすると、放射線量がちょっと変わってきてるというのも分かるし。線量の推移を見て、「なるほどな、こういうふうに減ってきたのか」とかもわかります。当然そこには除染という形で農地を除染してるので、そこを除染するとそのまわりの道路なんかの線量が下がったり。あるいは道路のまわりも除染もしてるので、したあとは線量が下がってるとか、そういうのも分かってきた。

—では、ふくしま再生の会のメインの活動はこの線量の測定とそのモニタリングということですか。

菅野：いやいや、全く違います。一番最初にそれからスタートして、並行して除染の方法とかなんかもやって、いろいろ提案もしました。俺たちはこの地域に再び住んで、生活できる環境にしてもらうために、除染というものをお願いしてきたわけです。ところが、そこと一致しないのが国の除染のやり方なの。

それはどういうことかという、国では空間線量率を下げることを目的としてやるってこと、ただそれだけなの。だから「じゃあ空間線量率を下げただけで、農業再開とか生活ができるの？」という、そこにちょっと結び付かないところがいっぱい出てくるわけです。結び付けるにはきちんとすべてを除染しないといけない。例えば池であれば、池は汚れてないとはいえない。池の濁り水の下には放射線物質がたまっている。「そういうものは眠ってるんだから、別に起こす

ことはないよ」という形で、そこは除染の対象にもしないわけ。

でも池というのは、農業用の水として使うわけです。水として使うときには、必ず水を動かせば下も対流で動く。濁り水も上がってくれば放射性物質が出てくることもあるもんだから、きちんと農地などと並行して、用水路とか水源地であるため池とか何かと一緒に除染をしないと駄目なんだけど、一体化してないの。

だからこれ、今でも遅れてる部分は、そういうところも一つの一端としてあるわけね。農水省がきちんとやっていれば、除染が遅れるとかはなかったと思う。

—モニタリングを行いつつ、農地再生とか環境再生を目指したのですね。

菅野：一応いま言ったモニタリングの目標として、見えないものを見える化する。データとして挙げられるものはデータとして、きちんと裏付けのあるデータをそろえていく。それも時系列的に、どういう変化が1年ごとに、あるいは半年ごとに変わっていくのかを、きちんと見ていくということ。

データを取るっていうと、行政は意外と嫌がるの。それはなぜかという、「安全なんだから、そんなことをやる意味がない」って言うんだけど、安全とか危ないからデータ取りをやってるんじゃないわけ。やっぱりきちんとした裏付けのあるそのデータで、どういう変化をしていくのかということを、知るってことが大事なの。

うちらは必ずデータを出しても、データから見て、それは安全だよとか、危ないよということは、絶対言わないです。それは利用する人が安全だと思えば安全だという形で利用してもらえばいいし。俺たちはそういうことはしない。

そのモニタリングと、あとは除染関係とか、あるいは農業の再生の分野でいろいろな栽培の試みをしています。例えばその汚染された土壌でお米を作ったり。その汚染も段階を踏んでいて、このお米はこれくらいの汚染された土壌で生産されたお米、こっちは汚染土壌が低い土で生産されたお米、このお米たちにどういう違いがあるんだろうとか、玄米と白米にしたときの違いとか、そういうところまでも全部きちんとそのデータを見る。データベース化して、その変化をみんなで見分けるということが大事なので、そういうことをするというのが一つです。

あとは、人間の心のケア。これも医療班で毎年、毎月やってるんです。これもさまざまな、例えば看護師さんから、ケアマネジャーから、お医者さんから。お医者さんも内科医も精神科医も、それぞれ入っての、心身ともに健康の部分を考えるということで。これも避難中から仮設住宅でもやってたし、あとは今でも、いちばん館でもやってるわけ。

—具体的には、どのようなことをしているのですか。

菅野：健康相談含めて、これもそれぞれお互いに分担し合って、一生懸命やっています。あとは、情報の発信。あとは大学生含めた、それぞれここで体験なり学習なりしてもらおうということ。私は特に自分で進んで積極的にやっているのは、やっぱり大学生、高校生。次の世代を担う人たちに、この現場を、現地を知っていただいて、これからの自分の人生に生かしてもらいたい。絶対どの分野に行っても参考になる部分はあるなという思いで行っています。

3. 飯館村で行う最先端の農業

—菅野さんは農業に先端技術を使っていられっしゃいますが、そのような技術を取り入れようと思うようになった理由をお教えてください。

菅野：この地域は、事故前から大学との関わりというのがうんと大きい。特に健康づくりなんていうのは、慈恵医科大学の夏合宿では、3週間近くここで合宿してもらって、ここで健康診断をもらって、当然一緒にどんな食生活をしてるのかも分かってもらったり。その慈恵医大の看護学校の助手の人たち、あるいは医者のお母も一緒になって。そして今度は研修とか何かやるときは、OBの方々も色々なところから来ていたな。

そのほかに、早稲田大なんていうのは、文化関係のやつの調査とか何かもそうだし。そういう

形でいろいろやってた。事故直前であれば「までいな休日」も含めてですね。

―昔からつながりはあったのですね。

菅野：いろいろと地域づくりなんかも含めて関わりを持ってやっていた地域なんです。

―では、大学との関わりから先端技術に興味を持ったのですね。

菅野：大学との関わりは、弾みがついたというところは一つあります。なんでかという、福島原発事故が起きてしまって、農業がここで再生できないので、ブランクが生じてしまった。そのブランクに甘んじてただ農業をやってたんでは、何も先につながらない。再生が始まって、飯館でそれぞれトライし始めたときに、これから将来につないでいくためには、最先端の技術を大いに活用しないと駄目だと。現場できちんとこの状況を見ていただいて、現場に合ったもので対応してもらわないと駄目だからということで、今もそれで躍起になっている。もうそれに尽きると思うくらいです。

最先端の技術を使うにあたっては、センサーを活用するというのが大事。どんなものでも。例えばセンサーを活用して、肥料分の濃度とか、水の量が少ないとか、もしくは野生動物がまわりから来た、来ないとかを確認します。あとは栽培改良、まあそういうところかな。そういう形を、常時対応できるようなものにするには、きちんと Wi-Fi も活用できて、情報を活用できる地域にしていけないと駄目なわけ。これは本当に大事なところだと思います。

今、東大の先生が手刈りの稲刈りをしたところに、自動で野生動物が動くようなシステムを取り付けています。それにはオオカミの目みたいなものをくっ付けてやっている。

―それは動物よけですか。

菅野：動物よけですね。自然災害から守るという意味です。うちのまわりはある程度、Wi-Fi が対応できるようなシステムにしているので大丈夫なんだけれども。うちの田んぼやわが家のところから結構飛んでいるんだな。向こうの家辺りまでも飛ばしてるんだよ。

―Wi-Fi が飛んでるのですね。

菅野：飛んでます。そういうものは溝口先生（福島大学教授）に今もやってもらってるんだ。

今それで情報通信網の話ね。そこで、いま圃場整備をやらうとしてるんです。圃場整備というのは、農地をきちんと管理しやすいような形に整備すること。それを大体 4 反歩から 5 反歩、あるいは大きいのでは 1 町歩くらいの田んぼを整備しようと。地元の人ができるだけ、今いる人ができるうちにやろうと。

例えば地元の人でもできなくなり、その後継者もできなくなった場合には、いま言った情報通信網を使うと、通勤農業もできるし、遠隔農業もできる。そうすると、都会にいる人だって、この農地を管理もできるわけ。栽培を管理する中では、Wi-Fi も含めた情報通信網の整備をしていかないといけない。次の世代に一体化してやりやすい環境をということで今、動いているところ。

大切な所は、この地域のコミュニティーをどういう風に構築するか。それが今大事なの。本当に大変です。だけど、大変だというのは、逆に言えば課題がいっぱいだからやりがいがあるかと、俺は思ってやってるの。負担だとは思ってない。トライすることの大事さ、これは学生さんも同じです。開拓者精神を含めた、何でもトライ、チャレンジすることの大事さ。「拓く」、あとは「興す」という、復興の興すのほうも含めて、開拓はどちらもひらくだけれども、そういう形が大事だなと思う。

何せ、俺はやれないことはやれないけれども、身の丈に合った形の中で、今のようなトライを続けたいなと思ってるだけです。

―スマート農業で、ICT やインターネットなどを使うと思うのですが、その中で難しいと感じることはありますか。

菅野：全てが難しいというか。すべてをこなせないというところが難しいです。こなせないというのも分かってやってんだけど、さまざまなタスクが次から次へと入ったりすると、いつの間に

やら忘れてしまっているということがある。

あともう一つは、ここでキュウリとパプリカを栽培してるんだけど、それは養液土耕水耕栽培というのをやってるの。それは、6時間先のセンサーで天気予報もキャッチして、あとはキュウリのベッドの中の根っここのところにもセンサーが入ってて、そこで養分があれば、ECの伝導率、電気を通す速さというのは、肥料分があると速いの。肥料が少なくなると時間がかかるというか、遅いとか。そういうのがあって。養分の量をきちんとキャッチして、「いま養分が足りないんだから、じゃあ養分を入れますよ」ということで、自動的に養分が入るようになっているの。余計なものは入れない。水管理も、土の中の水分が少なくなると自動的に、これだけの水分が必要だよということを設定をしておくので、その値まではきちんと水を入れてくれる。一日に5回とか6回とか、セッティングの仕方はさまざま。そういうセッティングを、今はうちの息子がきちんとやっている。

最終的には人間がその作物に必要な量を設定をしてやらないといけない。キュウリだったらキュウリの葉っぱや、つるの状態とか色具合とか、そういうのを確認をしていろいろ調整するのは、最終的には、やっぱり最後は人間。人間がそこで「プラスしてまた入れてやるか」とか、そういうことをしながら対応していくことが大事なのね。

—自らでやらないといけないことも多いということなのですね。

菅野：自然の恵みの中で、飯館の米というのはものすごくいい感じで、うまい米に出来上がる。しかし、最近例えば福島近辺だと、今は温暖化であまりにも暑過ぎて高温障害になってしまう。本来、植物というのは、夜は眠るわけ。眠るには気温が下がらないと駄目なんだけれども、夜も気温が高いということで、結局、眠る時間もないっていうことを踏まえて、温度を下げる。逆にお米を作る場合には根を保つために、水が温まっているけど、それがそのままになると高温障害で駄目なわけ。それでできるだけ冷やすのに水をかけろとか、そういった対応が、今必要な状況になってきている。そこは自然の状態をみんな感じ取ることが必要。この温暖化の影響を受けるのは皆さん。皆さん方の時代にもものすごく影響がいくんだからね。なぜ温暖化になってしまったんだろうということこそをきちんとこれから考えていかないと駄目だというのは、このような変化が起こっているからです。温暖化を進めてしまった結果、人間が生態系を壊してしまって地球上で住める場所がどんどん減ってきていて大変な状況になってきているということです。社会に出てからどんな部署に行こうとも、自然を大事に、そういう努力をしていかないといけない。そういうところが本当の基本にあるということだけは確か。

—震災の前から自然・環境に対する意識というのは高かったのですか。

菅野：俺の場合は帯広畜産大学を出てから、地元でさまざまな農協とかの役職は準備されたんだけど、「俺は自然と共に生きるから」ってことで断りました。自分で選んで生まれたわけでもないこういう地域で、逆に言えばそういうところに出会えてうれしかった。この選択でよかったのかなと思ったけれども、やはり自然な恵みを消費者に届ける、そういう農業の分野でというところが強かったです。

だから事故が起きたときに、正直言ってみてつくづく思ったのは、原発というのはエネルギーの分野で自然界にないものの活用だよね。私はよく、それをうんと強く感じるんだけど。エネルギーの分野で原発という、要するに人間の知恵が科学技術というものを活用する、ウランの平和的活用という形であるよね。そういう形でやってきた。

科学技術の活用という面を考えた場合に、それは完全に人間の暮らしや、命や、そういうものに寄与できる形でのきちんとした科学技術の活用であれば大丈夫なんですけど、いざ原発という「安全神話」という形が、事故が起きるまではもう「原発ほどいいものはないんだ」という形でみんな思ってた。誰しもが思ってたと思う。

特に原発を設置した双葉なり浪江地域の高校生含めて、事故が起きてからフランスに行って、「以前は自分たちが誇れる町だと思ってた」と。原発の事故が起きて、「もうそういう状況じゃない」ってやっとな気が付いたという話もあります。

やはり科学技術というものが、そもそも原発に限って言えば、原発をつくる技術、そして運転

する技術も必要です。平常に運転する技術があったからこそ、きちんとそれはできたと思う。でも、いざ有事になってしまったときに、抑える技術というものも伴っていなかったら駄目じゃないの？と。俺はそれを考えた。

事故はつきものだと思う。でも事故によって世界規模に放射能をばらまくような形では、全人類に影響を与えるわけ。しかもそれは人類だけじゃないんだよね。自然の中で生活しているその生態系、全てに影響している。地球や自然は、人間だけのものじゃないんだ。そこをきちんと考えないと駄目なわけ。人間は危ないから逃げろという形で避難をさせて、ある程度一定の基準以下のところに避難をさせたというのが今回の事故です。そこにも、いろいろと基準づくりではそもそも問題はあるんだけど。

天然記念物もそうだけれども、いろいろな動物、イノシシでもサルでも何でもそうです。みんなが共有する自然なわけ。そこでお互いにすみ分けをしたり、さまざまな形を取って、平穏な、バランスの取れた暮らしをそれぞれがしてるわけ。そのバランスが崩れてくると、うちらは人間サイドで見てるから。結局、人間の都合の悪いことを行った場合には、「これはもう駆除しないと駄目だ」ということで、駆除とか何かという一方的な形で、その動物を出てこないように鉄砲で打ったりとか、追い払ったりとかいろいろしてるけれども、全然それは問題解決にはなっていないわけ。原因をきちんと突き止めて、解決策をきちんと考えないといけないと思う。

4. 菅野さんが行ってきたさまざまな事業



―菅野さんが行っている飯館電力について、教えてください。

菅野：まず一つは、私が創設者ではないんだ。創設者でないといったって、創設者と同じような形なんだけども。

―創設に関わったということですか。

菅野：他の3人で飯館電力を立ち上げようという形でいて、私はそこに共感をしたって形で、4人目に入ったというだけです。

この飯館電力というものができたきっかけは、まず一つは、「エネルギーがもたらした事故なので、せめて飯館村民で、エネルギーについて考えて行動を取ってみようや」っていうところがありました。「結局それは、自然再生可能エネルギーを活用するということがあるんじゃないの」というところ。

自然再生可能エネルギーというのは、ただ単にソーラーの部分だけじゃなくて、そのほかにもいっぱいあるの。いっぱいあるよ、身近なところにエネルギーの発生源なんてなんぼでもあるから。その中で、すぐ対応してみんなにも発信できるのは、やっぱり地元の住民が中心になってやれる部分というのは大事じゃないのかということ。

意外とみんな、戻ってこれる人もこれない人も、みんなばらばらな中で、じゃあ何ができるのといったら、せめて、じゃあ少ない中でもちょっとソーラーの部分、再生可能エネルギーを介して、大事なものをみんなに考えてもらいましょうというところなんです。

―飯館電力はどのように発電しているのでしょうか。

菅野：低電圧の太陽光発電所が49基あって、そのうちソーラーパネルの下で農地として活用してる、ソーラーシェアリングってところが14基。空間の利用みたいな感じです。あとは農地として活用できないところに設置をした。農地として活用できないんだから、有効活用するのにソーラーパネルどうだべって形も含めて。

今この電力は、いろいろなところに売ってるわけ。向こうでも理解を示して、ほんのちょっと高い価格でも買ってくれるという形。このようなお話をして、それだけでもお金をもらえるようなシステム。そういうこともしながら、復旧というか、大事なところを考えてみようやということですね。

原発が全てではない。ソーラーパネルを介して、ちょっと考えてみてはどうですかというところなんです。原発をきちんと抑える技術があったならば、それは構わない。でもやっぱり不安要素がありますし、利害関係もあります。今回の事故なんてのは、自然災害以外はみんな人災です。しかし、国民はきちんと人災だということを分かってない。最近では、原発が稼働しない状態を、いま乗り越えてきてるんだよね。もっと工夫をして、原発を使わなくてもいいような形を見つけられないか。それが福島事故の教訓なんだよね。この事故から学び取るものがいっぱいあるなと思うんですけども。教訓を生かすのは次の世代の皆さん方にかかっているの。

―なるほど。

菅野：特に福島事故に関しては、福島の県民にとっては、廃炉がきちんと全て終わるまで、原子力発電所は運命共同体だよ。本当にそうだよ。大変だよ。それは俺たちは、あと何十年といったって、親の世代まで生きるにしたって30年しかないんだから。皆さん方はもっともっとあるんだから。だから、俺が今いろいろ考えてるのは、事故の教訓を運動というか、語りをしながら、そしてこの地域をどういうふうにやっていくか。復興というものは、この地域のコミュニティーをきちんと構築できたというか、本当に安心して暮らせるような地域ができたときに復興できたと思うんでしょね。そういうものだなというふうに思う。

―ふくしま再生の会であったり、農業も精力的に行っていると思うのですがその中で一番力を入れて取り組んでいたものは何ですか。

菅野：全部だな。だって、今でもどっちかをおろそかにするかなんてことは、何もない。おろそかにできるものはない。

―菅野さんの中ではどの仕事も、やっтерことが全部つながってる感じなのですか。

菅野：そうです。生きるっていうことを考えたらそうだと思います。そしてあとは、次の世代にどういうふうにつながってことを考えたら、どれも同じなんだ。要するに、持続可能な形で、地域も全てのものもいかないと駄目だと思う。

偉いことは何もできないですよ。飯舘電力も今社長という形でやってるんだけど、いま辞めたくはあるのだけれども、「いや駄目だ、もう少しやってくれ」という感じで。別に、手当てとか何かというのは、みんな一緒だから。社長も平役員も手当ては一緒。零細企業だから。でも責任は負わないといけない。登記上、社長となれば当然です。でもそもそも考えてみれば、仕事は与えられたものだけしかできないんだから。せめて仕事を与えられているときは、それはそれとして、やっぱりやらないといけない。地域づくりもそうだし、今は行政区長という形でもやっっているけれども。

―その区長とは、具体的には何をしてらっしゃるのでしょうか。

菅野：行政のまとめ役です。偉いわけではないんです。逆にみんなに育ててもらってるんですけども。ただ私を中心的な形で、みんなでまとまって対応していきましょうというような形だけです。

―具体的には、どのようなことを行う仕事なのですか。

菅野：地域の行政の安全安心な暮らしができることがまず第一です。今でいえば、健康で、防犯、防災に取り組んで。安心につながるような生活ができる地域づくり。当然そこにはさまざまな人と人との関わりの中で、それが一番大事なので。安全な地域づくりをやっていくのにどうしたらいいかっていうところが、正直言って一番大変なんだ。

今の課題は、子どもと一緒に生活していない、地域全体を見てもそういうところがあるというところが、大きなところだね。

―防犯や防災の活動というのは、ここではどのようなことをしているのですか。見回りとかをされたりするのですか。

菅野：当然、見回りはそれぞれやってます。ただ、気付いたときに、あるいは情報を共有することで、こんなことがあったからみんなで気を付けようとか、そんな形。あるいは行政区で消火器を各家庭に 1 個ずつ配るとか。いざ有事があつては困るんだけど、あつたときには命を守るということが大事なので。そのようなことを、避難訓練含めて、やっています。

―地区内の活動のまとめ役ということなんですね。

菅野：そうですね。あとは圃場整備。生活をするってことは、そこで生活できるなりわいがないと駄目なんで。そのなりわいの一つとして、農地というのは居住環境にも影響を及ぼすわけ。農地というのは、多面的機能を持ってるの。

ただ農業として、そこで収益を上げるだけじゃなくて、農地をきれいにして。荒れ地にしないで活用するということは、ここに住んでみたいというような雰囲気が出てくるわけ。例えば家の前に農地があつて、そこが荒れてたら、誰も住みたくないよね。それと同じなの。

あるいは治水関係。農地をきちんと管理していれば、いざ集中豪雨とか何かが来ても、農地に雨を一度ためてストックするとか、簡易的なダムの要素も含んでる。そういう効果もあるわけなので。農地というのは、いろいろな多面的機能も備えているわけなんです。

―行政区長には幅広い活動があるのですね。

菅野：いっぱいある。今は飯舘村全体で第 7 次総合振興計画というのを策定しています。これは各自治体どこでもやるんですけども。飯舘はいま第 7 次で、令和 8 年度から取り組むのに、いま策定を進めようとしているところなんです。今は専門部会も含めて始まっています。福大の先生も何人か入るみたいな話を聞いてます。俺も策定委員会のほうに入って、ちょっとまとめるものを持ってるけども。各地域の、将来どうするかというところも踏まえて 10 年間の計画を立てる。

国の事業とか交付金を使った地域づくりというのは、そういう計画に入っていないと駄目なの。
どこの町村でも同じですし、市でもどこでもそうです。

—貴重なお話をお聞かせいただき、ありがとうございました。